



Title	「隙」のある表現のための照明制作と作品群
Author(s)	籐, 晶子
Citation	デザイン理論. 2008, 53, p. 126-127
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/53564">https://doi.org/10.18910/53564</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 「隙」のある表現のための照明制作と作品群 籐 晶子／大阪芸術大学大学院博士後期課程

本発表者は、大学院後期課程でグラフィックデザインを専攻しており、研究課題は「隙のある表現」である。日頃、大学院においてはこの「隙のある表現」とは何かを制作と理論の双方から明らかにするため、印刷を媒体としたデザインだけでなく、多様な造形活動に取り組んでいる。

今回の発表作品は、この「隙のある表現」のひとつの方向として、作品の外部に生じる空間的な広がりに着目したものであり、半透明素材や透かしを施した部材を用いた照明器具の制作である。これらの2つの照明器具デザイン案は、和紙を素材としており、『OSAKA 光のルネサンス 大阪芸術大学 喜多俊之プロジェクト～光風景～』で採用されている。そのひとつは点灯すると底面に星形が投影され、もうひとつは小円錐形の集積から球形が形づくられている（図1）。

これらの照明作品は、本発表者も入会している大阪芸術大学・伝統工芸サークル（学生17名）によって、星形の照明が約100個、球形の照明が4個、3ヶ月余りの長い時間をかけて制作されており、大阪中央公会堂大ホールでの『OSAKA 光のルネサンス 大阪芸術

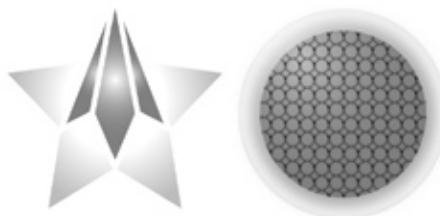


図1：2つタイプの照明イメージ図  
(左) 星形が投影される  
(右) 小円錐形の集積からなる球形

大学 喜多俊之プロジェクト～光風景～』において展示された（図2）。

この2つの照明作品は、以下のようなこれまでの試行錯誤の積み重ねの成果である。

星形の照明作品は、当初は高さ15cmの紙でつくられた。手間隙がかからずしかも低コストで試作できるので、光源の位置を何度も調整しながら、所期の星形投影を得ることができた。その折にわかったのは光源の位置を下げるに先端が鋭い大きな星形が投影されることである。この星形照明作品を、2006年夏に開催された大学院グラフィックデザイン・

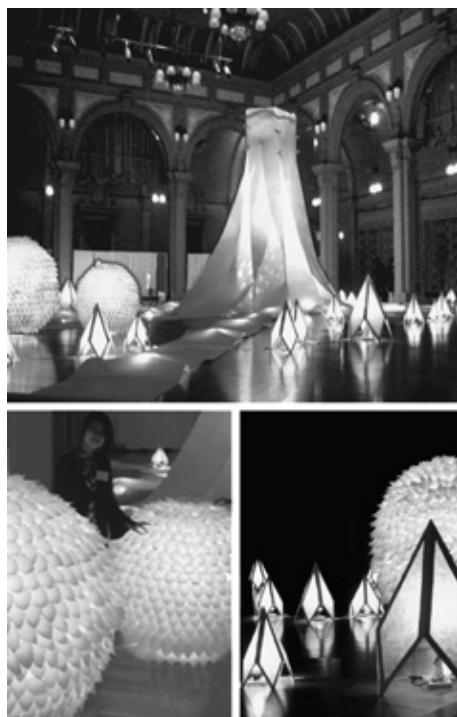


図2：大阪中央公会堂大ホールにて『OSAKA 光のルネサンス 大阪芸術大学 喜多俊之プロジェクト～光風景～』  
(2007年12月22日から24日まで)

コースのグループ展に出品した（図3）。この星形照明作品をより頑丈にするために金属素材を用いることを試みた。その際には光が遮断されないように、エッチングの腐食液を用いて透かし模様を施した（図4）。さらにサイズについても再考し、周囲の空間を広い範囲で照らし、遠くからも鑑賞できるように、高さ60cmのより大きな照明作品を制作した（図5）。こうした試行錯誤があり、2007年暮れの展示では針金や木材で補強された最大サイズ高さ100cmの星形照明作品が誕生した（図6）。

球形の照明作品は、小円錐形が集積されて形づくられる。今回の作品発表では、直径35cmの球形の表面を、直径3cmの円形の和紙を筒状にした小円錐形で隙間なく覆った照明を展示している。この照明作品は2006年度の美濃和紙あかりアート展で入賞している（図7）。そして2007年暮れの展示では最大サイズ直径約150cmの球体を制作した。この球体の表面を埋め尽くしている小円錐形は直径15cmの正方形の紙を筒状にしたものである。原紙を円から正方形に変更することで断裁による手間と無駄が省かれた。この照明作品群は、同じ形の繰り返しだあるが、重なりと光源からの距離によって陰影が生じて、それぞれが豊かな表情を見せてている（図8）。このように一連の同型の照明作品をつくり続け、昨年には長期間にわたって共同制作する機会に恵まれ、個人では手がけられない規模や数量の環境造形的な作品群を手掛けることができ、関係者の方々に感謝している。



図3

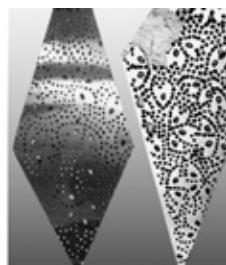


図4

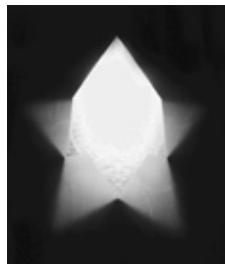


図5



図6



図7



図8

